

2017 年度

国 語  
(2 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 45分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

将来的には省エネを含めて自然エネルギーを増やすことが大事という話をしてきました。では、自然エネルギーであれば何でもいいかといえば、そういうわけでもありません。

ぼくは二〇一二年以降、各地で自然エネルギーが爆発的に増えているようすを、この目で見てきました。でも、そのほとんどは国や大企業、あるいは自治体(市町村)が中心になっている巨大プロジェクトです。こういった組織が自然エネルギーをすすめること自体は悪いことではないのですが、やり方に疑問を感じるものが少なくありません。

例として紹介するのは、大企業が中心のプロジェクトです。地方には使われていない土地がたくさんあります。土地を有効活用しようと考えている地方自治体は、都会の大企業と協力して、メガソーラーという大型の太陽光発電所や風車を設置しています。たいていの場合、自治体はエネルギーについてノウハウがありませんから、お金も設備も企業が準備して設置していきます。そうすると、地方にはわずかなお金が税金や土地の賃借料として入りますが、収入のほとんどは設備を持っている企業のものになってしまいます。

しかも、そこで得た収益の大半は地域で使われず、都会に持っていかれてしまいます。その地域に降りそそぐ太陽や風は、本来は地域の人たちのものです。ところが、住んでいる地元の人にとっては大きな発電所ができたというだけで、ほとんど何のメリットにもなりません。

事故をおこした原発を運営する東京電力と福島の人々との関係も、それと同じでした。福島の沿岸には狭い範囲に一〇基もの原発が立ち並んでいました。そこでつくられた電気は、すべて東京などの都会に送られ、福島県民は一ワットも使用していませんでした。でも、原発事故の被害を受けてもつとも苦しい思いをしています。

これに対して、「福島はお金をもらっていたのだからいいだろう」と言う人がいます。(Ⅰ)、原発のある自治体では多くの補助金をもらい、豪華な施設などをつくっていました。(Ⅱ) その大半はいまでは誰も住めない場所になってしまっています。故郷を奪われた人たちにとって、豪華な施設が何の役に立つのでしょうか?(Ⅲ) お金をもらえる地域はごくわずかなので、今回被災したほとんどの地域では、お金すらもらえていませんでした。

何より、もともと財政の苦しい地域を狙って、お金と交換に都会の人がいやがって受け入れない施設をつくらせるというのは、対等な関係では

ありません。このような不平等な関係をベースに成り立っている経済を「植民地型経済」と呼びます。植民地とは本来はある国が別の国や地域を軍事力や経済力によって支配下におき、資源や人材、富を収奪しゆうたつすること。植民地的な関係というのは、国家間にかぎらず、たとえば豊かな地域と貧しい地域の差を利用して、一方が他方から収奪するような構造になっているケースCを呼びます。

これに対して、地域が自立して自分たちの意志でつくる経済を「自立型経済」と言います。先に例としてあげた地方に大企業が太陽光発電所を設置するというケースは、「植民地型経済」のまま、ただ電源を原発から自然エネルギーに変えただけのものです。確かに放射能に汚染おせんされる心配はありませんが、都会と地方との関係性は以前と何も変わっていません。その関係を変えるためには、地方の人にとってメリットになる仕組みをつくる必要があるのです。

<sup>④</sup> 国や自治体が中心になっているプロジェクトでも、問題が生まれています。ぼくが取材した沖繩おきなわのある自治体では、自治体と国のエネルギー機関が二〇〇一年に二億円ずつお金を出し合い、合計四億円で三基の風車を建設しました。

ところが、二〇一二年にぼくが訪れたおそときには、三基とも故障で止まっていました。担当者に「なぜ止まっているのですか？」と聞くと、「台風で壊こわれました」と教えてくれました。でも、台風で壊れたのはその年だけではありません。前の年も、その前の年も、同じように台風で壊れ、そのたびに多額のお金をかけて修理していたのです。風車が回っているときは売電ばいでんした収入が市に入るので、年間を通すと収入よりも修繕費しゆぜんひのほうが高くついていました。その赤字分は、市民の税金から支払われています。だからこの風車は、市民から嫌きらわれていました。いまでは、直してもまた壊れるし、撤去てつそするにも費用がかかるので、壊れたまま放っておかれている状態です。

でも、沖繩に台風が来たのは最近のことではありません。毎年大きな台風がやってくることは、沖繩では子どもでも知っています。風車を建てるなら、台風のときはどうするのかという対策を考えるのはあたりまえです。自然エネルギーの設備は、いったん設置すれば二〇年以上使うものです。つくるのであれば、メンテナンDスも含めてきちんと考えなくてはうまくいきません。ところがこのケースでは、国と自治体がなんとなく「環境かんきやうにいいのだから」と建ててしまったために、何の対策もされなかったのです。

また、この自治体では専門の担当者を置いていませんでした。「1」ぼくに話をしてくれた担当者は、風車が設置された市のテーマパークの設備や機器を管理している方でした。日常のさまざまな業務に加えて、たまたまこの施設内に風車が建てられたため、「ついでに」担当させられてしまったのです。「2」

壊れた風車を見た人は、「やっぱり自然エネルギーはダメだ」と思うかもしれません。「3」でもそれは自然エネルギーの問題ではなく、プロセスに問題があるのです。きちんと対策をすれば、台風対策もできます。実際に沖縄の別の自治体では、台風の際はその影響を受けないようたためるタイプの風車が導入され、故障もなく順調に動いています。

全国には、このような「設備をつくること」が目的<sup>⑤</sup>になってしまっているプロジェクトがたくさんあります。ぼくは、風が吹かないところに建てられた風車や、採算がまったく合わずに止まっているバイオマス発電所など、何億円もかけて設置したのに、いまはガラクタ同然になっている設備をたくさん見えました。

そうしたケースでは、国や市側は設備を建てたことで満足してしまい、その後のメンテナンスやどう活用するかについてのビジョンを、まるで持っていないのです。国や自治体の担当者は、設備ができた段階で「うちはこんなりっぱなモノをつくりました」とわかりやすい「成果」をしめすことができます。「4」担当者は、だいたい二年から三年ほどで部署を異動するので、そのあと動かなくなっても誰も責任をとることはありません。「5」また、たとえつくった人が熱心でも、新しい担当者が関心が薄く、放っておかれてしまうケースもあります。

一方、国から依頼<sup>依頼</sup>されて設備をつくった民間企業にはお金が入ります。この沖縄の風車の例でも、修繕する際に受注した大企業を通してしか対応できない契約<sup>契約</sup>になっていました。そこで、風車が壊れるたびにその業者は他より高額な費用を請求<sup>請求</sup>してもうけていました。このような仕組みを見ると、設置したそれぞれの人にとっては、風車が動かなかったとしても十分なメリットがあったのです。

このような問題がおきているのは、エネルギーに限ったことではありません。莫大<sup>ばくだい</sup>なお金を使って役に立たないものをつくる問題のある公共事業は、道路や空港、建築物など、あらゆる分野に存在しています。とくに巨大なお金が動く原子力発電をめぐる分野では、こうしたおかしなことがつづいてきました。たとえば、国が三兆二〇〇億円以上の予算をかけて一九六〇年代からつづけてきた「核燃料サイクル事業」は、度重なる事故によって二〇一四年十一月現在、いまだに一ワットの電気も生み出していません。にもかかわらず、多額の維持費<sup>維持費</sup>を支払いながら政府の方針で継続<sup>継続</sup>することだけが決まっています。

そのお金の出所は、わたしたちが支払う税金や、高速道路料金、電気料金などです。本来は「公共」のための仕事ですから、みんなのお金がいんなの役に立つように使われるべきなのですが、実際には一部の人だけがもうかるシステムに吸収されていっています。それを「利権構造」と呼びます。国の予算の一部は、そんなモノのために使われているのです。日本政府の財政はずっと赤字つづきだというのに、いつまでもそんなこと

をくりかえしていいのでしょうか？

ぼくが「自然エネルギーの設備を増やすだけではダメ」と言うのは、そうした背景のもとに、エコを語って利権を得ようとする人たちがいるからです。このような無駄を生む仕組みを見直すことは、やる気にさえなれば十分できることです。そのためには、責任ある組織がしっかり準備をして、地域住民の声を反映させたビジョンをつくり、お金の流れを透明にして、第三者機関がチェックできるようにしておく、といった対策が欠かせません。

（高橋真樹著「ご当地電力はじめました！」より一部改変）

（注）バイオマス発電：再生可能な、生物に由来する資源による燃料発電のこと。廃棄される紙や家畜の排泄物などを利用する。

問一 — 線①「その」は何を指していますか。本文中からぬき出し、始めと終わりの三字を答えなさい。

問二 — 線②「大企業が中心のプロジェクト」とありますが、筆者はどのようなところに疑問を感じていますか。次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 土地を有効活用しようとする地方自治体が、巨大なソーラーを、余分な土地に設置させること。
- イ 施設を設置した土地の賃借料は地方に入るが、エネルギーの収入は企業のものになってしまうこと。
- ウ 地方自治体にはエネルギーについての知識と経験がないため、お金も設備も企業に準備してもらおうこと。
- エ 自然エネルギーの収益が都会に持っていかれてしまい、地元の人にはほとんど還元されないこと。
- オ 福島の沿岸部の狭い土地に、たくさん原発が立ちならんでいること。

問三 ――線A～Eのことばの意味はどれですか。後のア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。(同じ記号は一回しか使えません。)

A プロジェクト    B メリット    C ケース    D メンテナンス    E ビジョン

ア 維持<sup>いじ</sup>    イ 見通し    ウ 情報    エ 利点    オ 事例    カ 計画

問四 本文の(Ⅰ)～(Ⅲ)にはどのようなことばが入りますか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(同じ記号は一回しか使えません。)

ア ところで    イ でも    ウ だから    エ また    オ たしかに

問五 ――線③「対等な関係ではありません」とありますが、これについて次の問いに答えなさい。

(1) それは、何と何の関係ですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 発電所と豪華な施設    イ 地域と田舎    ウ 町と村    エ 都会と地方    オ 大企業と中小企業

(2) 「対等」ではない関係とはどんな関係ですか。「～関係」につながるように、本文中から三十字でぬき出し、その始めと終わりの三字を答えなさい。

問六 — 線④「国や自治体が中心になっているプロジェクトでも、問題が生まれています」とありますが、どのようなことが問題になっていきますか。次の中からふさわしいものをすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 沖縄のある自治体が、国と半分ずつお金を出し合い、風車を建設したこと。
- イ 毎年台風がやって来るにもかかわらず、風車を建設してしまったこと。
- ウ 風車は毎年のように壊れ、そのたびに多額のお金をかけて修理していたこと。
- エ 三基の風車を稼働させて、建設費以上のお金を稼ぎ出そうとしたこと。
- オ 壊れた風車は撤去代もかかるため、その場合はそのまま放置されていること。

問七 本文には、次の文がぬけ落ちているところがあります。「1」「5」のどこに入れるのがもっともふさわしいですか。一つ選び、番号で答えなさい。

この人は動かない風車を担当させられて迷惑に感じていましたが、それもそのはずです。

問八 — 線⑤「設備をつくることが目的」になってしまっている」とありますが、そうならないようにするために筆者はどのようなことが必要だと述べていますか。次の中からもふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 設備を動かすための責任ある国と自治体の運営機関
- イ 環境に良いものは積極的に増やしていこうという社会の機運
- ウ 設備を維持するためにはお金がずっとかかるのだという覚悟
- エ 地震や台風などの災害を事前に予測するための研究
- オ 建てた後のメンテナンスや活用についてのビジョン

問九 最初の〓線部分に「将来的には省エネを含めて自然エネルギーを増やすことが大事」とありましたが、「自然エネルギーを増やす」にあたっては、どのようなことに気をつけなければならないのですか。「〓こと」につながるように、本文中からぬき出し、始めと終わりの三字を答えなさい。

問十 次の(1)〓(3)は「自然エネルギー」や「電力」に関する知識を問う問題です。それぞれ答えなさい。

(1) 次の中で「自然エネルギー」にあてはまらないものはどれですか。二つ選び、記号で答えなさい。

ア 火力発電    イ 水力発電    ウ 風力発電    エ 太陽光発電    オ 原子力発電

(2) 次の中で「自然エネルギー」の特徴としてあてはまらないものはどれですか。一つ選び、記号で答えなさい。

ア エネルギー変換効率や費用の面において、従来のエネルギーよりもかなり優れている。

イ いずれなくなる有限の化石燃料を用いておらず、地球環境への負担が少ない。

ウ 世界各国で、導入目標を決めたり、利用に向けての取り組みが進められている。

エ 温室効果ガスを排出しないため、地球温暖化対策の一つとして重要視されている。

オ 自然の営みを利用しているので、半永久的に得られ、継続して利用できる。



(3) 次は、発電別の電力のシェア(分担)についての表と説明文です。よく見て、後の《問》に答えなさい。

年度	1960	1970	1980	1990	2000	2010	2014
A	63.5%	23.1%	16.6%	10.7%	8.3%	7.8%	8.4%
B	35.7%	13.2%	4.5%	9.7%	18.4%	23.8%	31.0%
C	0.0%	1.5%	15.4%	22.2%	26.4%	27.2%	46.1%
D	0.7%	59.0%	45.6%	28.6%	10.7%	8.3%	10.6%
E	0.0%	1.6%	16.9%	27.3%	34.3%	30.8%	0.0%
F	0.0%	0.0%	0.2%	0.2%	0.6%	1.2%	3.2%
その他	0.1%	1.6%	0.8%	1.3%	1.3%	0.9%	0.6%

発電の電源の移りかわりを見ると、一九六三年度に初めて火力発電による電力が水力発電による電力を上回り、いわゆる「火主水従」の発電形態に移行しました。その後の電源開発は、石炭火力から石油火力への転換により、大容量・高効率の石油火力発電所を中心に進められました。

しかし、一九七三年の X をさかいに、原子力発電、石炭火力発電、天然ガス火力発電などの開発がどんどん進められ、電源の多様化が図られてきました。ただし、東日本震災の影響により、二〇一三年九月以降、原子力発電所停止が続いたため、二〇一四年度の原子力分担はゼロとなっています。

(参考『エネルギー白書二〇一六年度版』より一部改変)

《問》説明文の X にあてはまることは何ですか。自分で考えて答えなさい。また表の A～F にあてはまるものは何ですか。次のア～カからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(同じ記号は一回しか使えません。)

- ア 石油火力
- イ 石炭火力
- ウ 天然ガス火力
- エ 水力
- オ 原子力
- カ 新エネルギー

〔二〕

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

岡の上に百姓のお家がありました。家がびんぼうで手つだいの人をやとうことも出来ないので、小さな男の子が、お父さんと一しょにはたらいしていました。男の子は、まいにち野へ出たり、こくもつ小屋の中で仕事をしたりして、いちんちじゅう休みなくはたらきました。そして、夕方になるとやつと一時間だけ、かっつにあそぶ時間をもらいました。

そのときには、男の子は、いつもきまつて、もう一つうしろの岡の上へ出かけました。そこへ上がると、何十町か向こうの岡の上に、金の窓のついたお家が見えました。①男の子は、まいにち、そのきれいな窓を見にいきました。窓はいつも、しばらくの間きらきらと、まぶしいほど光っています。そのうちに家の人がとをしめると見えて、きゆうに、ひよいと光が消えます。そして、もう、ただのお家とちつともかわらなくなつてしまいます。男の子は日ぐれだから金の窓もしめるのだなと思つて、じぶんもお家へかえつて、牛乳とパンを食べて寝るのでした。

或日お父さんは、男の子をよんで、

「おまいはほんとうによくはたらいておくれだ。そのごほうびに、きょうは一日おひまをあげるから、どこへでもいってお出で。ただ、このおやすみは、神さまが下さつたのだということをわすれてはいけないよ。( \* ) くらしてしまわないで、何かいいことをおほえて来なければ。」と言いました。

男の子はたいそうよろこびました。②では、今日こそは、あの金の窓の家へいって見ようと思つて、お母さまから、パンを一きれもらつて、それをポケットにおしこんで出ていきました。

③男の子にはたのしい遠足でした。はだしのまま歩いていくと、往來の白いほこりの上に足のあとがつかしました。うしろをふりかえつて見ると、じぶんのその足あとがながくつづいています。足あとは、どこまでもじぶんに、ついて来てくれるように見えました。それから、じぶんの影法師も、じぶんのするとおりに、いっしょにおどり上がつたり、走つたりしてついて来ました。男の子にはそれがゆかいでたまりませんでした。

そのうちに、だんだんおなががすいて来ました。男の子は道ばたのいけがきのまを流れている、小さな川のふちにすわつて、パンを食べました。そして、すきとおつた、きれいな水をすくつて飲みました。それから、食べあましたかたいパンの皮は、小さくくだいて、あたりへふりまいておきました。そうしておけば、小鳥が来て食べます。これはお母さんからおそわつたことでした。

男の子はふたたびどどん歩きましました。そして、ようやくのことで、たかい、まっ青な、いつも見る岡の下へつきましました。男の子はその岡を上がっていきますと、れいのお家がありました。しかしそばへ来て見ると、そのお家の窓はただのガラス窓で、金なぞはどこにもはまってはいませんでした。男の子はすっかりあてがはずれたので、それこそ泣き出したくらいにがっかりしました。

と、お家からおばさんが出てきました。そして何かご用ですかと、やさしく聞いてくれました。男の子は、

「私は、うちの後ろの岡の上から見える、このお家の金の窓を見に来たのです。でも、そんな窓はなくて、ただガラスがはまっているだけですね。」と言いました。おばさんは、くびをふって、

「私の家はびんぼうな百姓ですもの。金などが窓についているはずはありません。金よりもガラスの方があかるくていいんですよ。」

こう言って笑いながら、男の子を戸口の石だんにこしかけさせて、お牛乳を一ぱいと、パンを一きれもって来てくれました。おばさんは、それから、男の子とちよほどおない年ぐらいの女の子をよび出しました。そして、二人でおあそびなさいというように、うなずいて見せて、ふたたびお家へはいつて仕事をしました。

その小さな女の子も、じぶんとおなじように、はだしのままで、黒っ茶けた木綿の上着を着ていました。しかし、その髪の毛は、ちょうど、男の子がいつも見ている光った窓のように、きれいな金色をしていました。それから目は、ま昼の空のようにまっ青にすんでいました。

女の子は、にこにこしながら、男の子をさそって、お家の牛を見せてくれました。それは、ひたいに白い星のある、黒い子牛でした。男の子はじぶんのお家の、四つ足の白い、栗の皮のような赤い色の牛のことを話しました。女の子は、そこいらになっているりんごを一つもいで、二人で食べました。二人はすっかりなかよしになりました。

男の子は、金の窓のことを女の子に話しました。女の子は、

「ええ、私もまいにち見えていますわ。でも、それは、あっちの方にあるんですよ。あなたはあべこべの方へ来たんですわ。」と言いました。

「いらっしやい。こっちへ来ると見えるのよ。」と、女の子はお家のそばの、すこしたかいところへ男の子をつれていきました。そして、金の窓は見えるときがきまつているのだと言いました。男の子は、ああきまつている、お日さまがはいるときに見えるのだと答えました。

二人は小高いところへ上りました。女の子は、

「ああ、今ちよど見えます。ほら、ごらんなさい。」といいながら、向こうの岡の方をゆびさしました。

「ああ、あんなところにもある。」と男の子はびっくりして見入りました。しかし、よく見るとそれは岡のじぶんの家でした。男の子はびっくりして私はもうお家へかえるといい出しました。そして、もう一年もだいにポケットにしまっていた、赤いすじが一すじはあった、白い、きれいな小さな石を、女の子にやりました。それから、とちの実を三つ、びろうどのようなつやのある、あかいのと、ぼちぼちのついたのと、牛乳のような白い色をしたのと、その三つをやりました。そして、またこんどくるからといって、おおいそぎで走ってかえりました。女の子は、男の子があわててかけてかえるのを、びっくりして見おくっていました。⑥

男の子は、息をもやすめないで、どんどん走ってかえりました。しかし道がずいぶんとおいのでお家へついたときには、もうすっかり暗くなっていました。

じぶんのお家の窓からは、ランプのあかりと、ろのたき火とが、黄色く赤く見えていました。ちょうど、さつき岡の上から見た時と同じように、きれいにかがやいていました。男の子は戸をあけてはいました。お母さんは立って来て、頬ほずりをしてむかえました。小さな妹も、よちよちかけて来ました。お父さんはろのそばにすわったまま、にこにこしていました。お母さんは

「どこへ行って来たの？ おもしろかった？」と聞きました。

「ええ、ずいぶんゆかいでしたよ。」と男の子は、うれしそうにいました。

「何かいいことをおぼえて来たかい？」とお父さんが聞きました。

「私は、じぶんたちのこのお家にも、金の窓⑦がついているということをおそわって来ました。」と、男の子はこたえました。

(鈴木三重吉著「岡の家」より)

問一 — 線①「男の子は、まいにち、そのきれいな窓を見にいきました」とありますが、それは男の子にとってどんな時間だったと考えられますか。その説明になるように、次の□に一字ずつ入れる形で答えなさい。ただし1～5と7は本文からぬき出し、6は自分で考えて答えなさい。

1 □□なくまいにちはたらいっていた男の子にとって、2 □□の3 □□□だけ、向こうの岡の上の  
4 □□□□と光る5 □□□を見に行くことは、6 □□□で7 □□□□遊びの時間だった。

問二 ( \* ) には、しっかりした見通しや目的のないまま過ごす様子を表す擬態語が入ります。それはどれですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア うかうか    イ うきうき    ウ うじうじ    エ うずうず    オ うだうだ

問三 — 線②「では、今日こそは、あの金の窓の家へ行って見よう」とありますが、なぜそう思ったのですか。その理由としてあてはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア お父さんから貴重な休みをむだに過ごしてはいけないとアドバイスされたから。  
イ ずっと向こうの岡の家の金の窓が気になっていて、くわしく知りたかったから。  
ウ 男の子にとって金の窓を知ることが、今いちばん有意義なことに思われたから。  
エ 家の仕事で忙しい男の子にとって、金の窓の家に行く機会が限られていたから。  
オ 金の窓を見に行かせてくださいと神様にお願したら、休日をくださったから。

問四 — 線③「男の子にはたのしい遠足でした」とありますが、どのようなことが「たのしい遠足」だったのですか。あてはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア はだしで歩くと、ずっとどこまでも歩いていけそうな気がしたこと。
- イ 足あとがどこまでもじぶんについて来て、まるでお供のようだったこと。
- ウ 岡の上の金の窓の家までいってみたいという目標があったこと。
- エ じぶんの影法師も、じぶんにあわせて動き、ともだちのようだったこと。
- オ 白いほこりの上の足あとがながくつづいていておもしろかったこと。

問五 〰線A「影法師も」から〰線E「金なぞは」の中で、働きが異なるものはどれですか。一つ選び、記号で答えなさい。

- A 影法師も
- B パンの皮は
- C 小鳥が
- D 男の子は
- E 金なぞは

問六 — 線④「おばさん」とありますが、この人はどのような人ですか。次の中から人物像としてあてはまるものをすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 見知らぬ男の子がやってきても変に思わずに、声をかけてあげようとするやさしい人。
- イ まずしい百姓のくらしを残念に思い、貧乏からはやくぬけだしたいと考えるような人。
- ウ 金の窓よりもガラスの窓のほうが、外の光がさしこんできていいと考える計算高い人。
- エ せっかく来たのだからと、牛乳とパンで男の子をもてなそうとする心づかいのある人。
- オ 娘と男の子はちょうどいい話し相手だからと、二人を遊ばせようとする、大らかな人。

問七 — 線⑤「ああ、今ちょうど見えます。ほら、ごらんさい」と女の子に言われた男の子は、向こうの岡を見て、どのように感じましたか。そしてどのような思いをもって、家に帰ったのですか。次の文章の1～6の□に一字ずつ入れる形式で答えなさい。ただし1と3は本文からぬき出し、2と4～6は自分で考えて答えなさい。

初めはいつもとはちがう場所で1□□□□が見えることに2□□□□が、さらにそれが3□□□□だとわかり、もっと2□□□□。そして、とても4□□□□なって、大急ぎで走って帰った。遠くからいつもあこがれて見ていたものは、実は大変5□□□□なところにもあったのだと気づき、大きな6□□□□をしたような思いをもって帰ったのである。

問八 — 線⑥「さらさらした夕日の中に、いつまでも立って見ていました」とありますが、このときの女の子の気持ちはどのようなものでしたか。

次の中からもっともふさわしいもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア 男の子がぶじに家に帰れるかどうか心配でたまらない気持ち。
- イ 男の子となかよくなれたことを、とてもうれしく思う気持ち。
- ウ 男の子と次に会えるのはいつだろうかとしれつたく思う気持ち。
- エ 男の子があまりにも早く帰ってしまい、泣きたくなる気持ち。
- オ 男の子が金の窓を一緒に見る仲間になってくれて喜ぶ気持ち。

問九 — 線⑦「金の窓」とありますが、これについて次の問いに答えなさい。

- (1) 「金の窓」は何をたとえていますか。自分で考えて答えなさい。
- (2) 「金の窓」と(1)で答えたものは、どのような点が似ていますか。「金の窓」の特徴をふまえて説明しなさい。

## 〔三〕

次の——線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① 映画のジマクを見る。
- ② 自分の意見はソッチヨクに言うべきだ。
- ③ 彼女は有名なピアノの先生にシジしている。
- ④ 今回の舞台は若手のコウエンが目立った。
- ⑤ ポスターを画びょうでトめた。
- ⑥ メダリストが町をネリ歩く。
- ⑦ かぜを引いて悪寒がする。
- ⑧ 体調が悪いので養生する。

## 〔四〕

次の①～⑥の□に一字ずつ入れ、( )の意味になるように、四字熟語を完成させなさい。

- ① □我□中 (あることに心をうばわれて、われをわすれること。)
- ② 玉□混□ (よいものと悪いものが入りまじっていること。)
- ③ 自□自□ (自分でした悪いおこないの結果を自分が受けること。)
- ④ □□応変 (その場その場の変化に応じて、もつともいい方法をとること。)
- ⑤ □□工夫 (新しい思いつきや工夫。)
- ⑥ □往□往 (たくさんの人が混乱して、まとまりのないこと。)









